

# 図書館通信 —54—

1981. 2

## 《座談会》

### 研究者とレファレンス・サービス

日時 昭和55年10月18日(土)

場所 附属図書館大会議室

出席者 教官：大江泰一郎(人文・比較法)、北里洋(理・微生物学)、後藤昭雄(教育・国文学)、土屋慶之助(法短・経済史)、平井信之(農・改良木材)、\*誌上参加 久保清(工・無機工業化学)、長島弘幸(教養・物理学)。図書館：豊川卓爾(館長)、近藤禎禎男(閲覧課長)、長南千恵子(参考調査係長)。編集委員：本間重紀(人文・経済法)、須貝静直(教育・音楽史)、下村一夫(図・司会)、藤田みよ子(図)、塚本雅美(図)、山川玲子(図)。(敬称略)

**館長** 今、大学図書館がかかえている問題は、いろいろありますが、レファレンスは学生・教官のいずれにとっても重要な部門で、全国的、世界的にレファレンス・ワークの必要性、重要性が強調されています。利用者の立場からいっても、もっとも関心をもたれている問題です。そこで、今日は各学部、各専門分野からご出席いただきました。自由に発言していただきたいと思います。

レファレンスの内容については、範囲が広いですし、また、静大の場合、まだ歴史も浅く、したがって研究図書館としてのサービスの内容についての不満とか欠点だとか、いろいろな問題がありすぎるくらいあるものですから、そういう点をザックバランに出していただくことが大事だと思います。それと同時にその裏付である人員の問題、お金の問題とかが当然出てくるわけで、そういう問題も含めていろいろな角度から意見を出していただきたいと思います。

なお、最初、この座談会を企画した時、学生を

含めたレファレンス問題について話合おうじゃないかということだったのですが、時間と枚数との関係で、今回は研究図書館としてのレファレンス問題を中心に話していただきたいと思います。学生のためのレファレンス業務については、また別な機会をもとうということになっております。

#### ■レファレンスを利用した印象

**司会** 初めに、図書館のレファレンスを利用された印象を話していただきたいと思います。

**後藤** レファレンスといえますと、僕の認識としては、静大で見られない雑誌を依頼して複写してもらうことが一番です。国文学研究資料館に所蔵されているマイクロフィルムの目録や国文学関係の論文の巻末のジャンル別・時代別の目録が図書館にあるものですから、見たいものがあれば参考調査係にお願いして複写を取寄せてもらいます。また、学生の卒論の指導の場合にも、これらを利用するよう指導しております。

ですから、系統的な資料の探索を参考調査係にお願いすることは特にありません。ただ、利用する側から言いますと、コピーが20日から1か月近くかかるわけですが、もう少し早く手に入れることができないかと感じております。

また、レファレンスの直接の問題でなく図書館

#### もくじ

座談会 研究者のレファレンス・サービス	1
国際連盟刊行物資料について	7
浜松分館だより	8
図書館委員会報告	8
教官著作寄贈図書	8
お知らせ	8

自体の問題かと思いますが、ここの図書館ではある程度紀要は揃っているのですが、交換を前提としているものについては欠けているものが多い。静大では、国文学会のような組織がないので、交換すべき雑誌がない。ですから、そういう雑誌を収集していただきたいと思います。

**土屋** 僕の場合、文献調査をどのようにするかと言いますと、たいがい自分で他の大学図書館に行って、現物を見れる所は現物を見てカードはみない。また、現物を見せてくれない所では、カードを調べて窓口で借りて、使えるかどうかを確かめる。そして、東大や一橋大などでは貸してくれませんかから、その場合には、こちらの参考調査係を通してコピーの依頼をするわけです。ですから、文献調査という意味では、文献がどこにあるかということをお初めからお願いする形ではレファレンスを利用していないわけです。こういう文献がどこの大学にあるからコピーをお願いするということがレファレンスを専ら使うとか、外国からこういうコピーを取らせて欲しいとかでお願いするということです。

**大江** 僕の場合の利用の仕方は研究のスタイルに関連していると思います。暫く前まではソ連の20年代を研究していたものですから、それに関する資料の所在というものは自分でも知っていて、そこに行かざるを得ないということで現地で利用する。ただ、テーマを拡大したり、現代の方にテーマを移したりしますと、いろいろのソースが必要になってきて、自分で所在のわからないものとか、あるいは文献を読んである文献の所在を知っても、それが正確に表記されていなくて、なかなか探索できないという場合があります。そういう場合はレファレンスをお願いしています。そういう意味では、こういう文献があるらしいけれども探してくれないかという非常に横着な使い方をしてしているわけです。研究者としての使い方がそれでいいのかは問題であろうかと思いますが、非常に便利であるという気持ではいるわけです。

**北里** レファレンスは外国の出版社の住所と買った本の値段を知るために一回使用しただけです。他大学のもののコピーができることは知っていましたが、自分のまわりの研究者をみましても、あまり使っておりませんし、少なくとも我々の分野ではまだ定着していません。私の場合には個人的なレファレンスというか、研究者仲間と連絡をとっておいて電話をかけてコピーして送ってもらうようにしています。手続き的に非常に簡単ですし、電話をかければ3日か4日で着くという

ことなんです。

**平井** 私達の分野の関係の雑誌はできるかぎり、静大の中ですべてありますが、研究分野が新しいので、工学とか物理学とかの方面の雑誌が必要になってきます。そういうときには文献をお願いして取寄せていただいたりするわけです。私の経験では時間がかかる場合もありますが、ほぼ満足と申しますか非常にありがたく思っております。

**\*長島** 私の場合は、研究の対象が自然科学の中でも、中間分野的なものなので、関心のある論文が、物理系の雑誌のみならず、化学・生物・数学系統の雑誌にも載ることが多く、学内で手に入らないものがあります。レファレンスをお願いして、取寄せてもらうことが多く、非常に便利に感じています。

### ■研究者の文献探索法

**司会** 次に、先生方の文献探索の方法とレファレンスの関係についてお話ししていただきたいと思っております。

**大江** あるテーマについて基本的な文献を読むことから始めて、そこで使われているものを次々とたどって行く。そのうちに運が良ければ、そのテーマに関するビブリオグラフィがあることもあり、いわば蜘蛛の巣をたどって行くということでカードを作ってゆく。そういうなかでレファレンスにコピーをお願いすることがあるのです。ただ、レファレンスを通じて文献を取寄せることでは満たされないものがあります。土屋さんが先程言われたことなのですが、社会科学の場合には、個別の文献がはめこまれている歴史的・社会的文脈が非常に大きな意味を持つことが多いわけですね。例えば、ある雑誌の発行時期、あるいは版形、活字、紙質などを含めた発行形式とその変化、さらには、雑誌の裏表紙に出ている広告とか、そういうものが重要な意味をもつことが多いわけです。そういうものは、参考調査係を通じて該当論文だけを取寄せてもらうことではわからない。おそらく書架へ直接行って、その周辺を引っくり返してみるといことをしないとわからないわけです。コピーしたものを使うときには一種の危険性を感じるという思いも思います。そういう問題があるのではないかと思います。

**北里** 私は地球科学ですが、思うに文献探索の持つ意味は二つある。一つは昔をたどっていく時に必要な場合と、もう一つはアイデアというか新しい情報をいかに早く広い範囲で手に入れるかということです。

昔をたどるという場合、まず最初にやることは、その研究史というものを全部洗いざらいします。その方法としては、論文に出ている文献を段々孫引いてやるということが一つ。もう一つは、例えば、ある地域の研究であれば、地質調査所から出版されている『地質文献目録』を、また、地域でなく、ある広い一定の分野についての歴史を調べる場合には、アメリカの『Earth Science Review』という雑誌に掲載される各分野毎のレビューと、その年までの文献リストをみます。そういうものを使えば、大体漏れなくわかるということになります。

二番目は、アイデアというか、誰が先にその問題に唾をつけたかという話ですと、全体的な、先端的なことに関しては、『Science』とか『Nature』とかいうものをみることによってわかります。非常に個別的な分野の場合には、その分野の雑誌をみます。

**平井** 自分達がとっている雑誌についているビブリオグラフィを読み、それを取寄せてみるという風にどンドンたどっていくわけです。また、例えば、レオロジーならレオロジーのアブストラクトがありますし、『科学技術文献速報』みたいなものもあります。普段はあまり関係のない領域でも、例えば、『建築雑誌』や『材料』という雑誌をみますと関係する文献が載っていますので、その文献をお願いするわけです。

**\*長島** 情報過多時代であり、自然系の中でも読むべき雑誌にすべて目を通して時間はありません。したがって関係の深い仕事の有無を知るのには、研究会等でもたらされる情報、代表的な雑誌、関係のある論文の参考文献、の順になっています。

### ■研究者とレファレンスの接点

**本間** レファレンス・サービスと研究者の情報検索の方法との相互関係という観点からは、なかなか接点が見つけにくいと思います。現状では、レファレンス・サービスについて「コピーを依頼することだ」という認識が一般的だといっていいと思いますが、このような認識の基礎が研究者側の文献探索の方法自体の中にある。研究者には、それぞれ自分の専門のテーマがあるわけで、このテーマについて情報検索をしようとする時は、一方ではかなりの部分まで本人が情報源を知っている。他方では、わからない情報源の探索は、文字通り手工業的にやらないとつかめないという資料自体がもつ性格があります。

また、自分のテーマでなく、そのテーマの属す

る領域ということになりますと、多かれ少なかれ何らかの形でビブリオグラフィが出ている。要するに、個々の研究者からいえば、情報・資料がはっきりわかっているか、わからない場合は自分の手足を動かして探索するしかないという感覚があるわけです。しかも、これが個々の研究者にとってはメインの仕事であるわけで、その意味では、研究者にとって最も重要な情報検索の部分では参考調査との接点がかみにくい。こういう構造関係があると思います。

したがって、現状では、テーマや専門に関する入手しにくい資料でなく、関連領域などの、一部専門領域を含むと思いますが、入手することは比較的簡単だが静大にない文献について、所在の調査だとかコピーの依頼だとかというところで、レファレンスとの接点を求めざるを得ません。それにしても、たとえ関連領域であっても、私たちは、あるテーマについてどんな情報があるかということレファレンスに依頼するという発想をしたことがないのではないかと思います。卒直に言って、それは図書館に依存できるのだろうかという疑問が研究者側にあります。ここをどう考えるかが、さしあたり問題だと思います。

**近藤** 本間先生が言われたことは、まさにそうだと思います。そのことが図書館業務を遅らせている原因ではないかと思います。先生方が、文献を独自で調査されて間に合っているということがあって、その結果としてレファレンスの訓練が全然できてこないことになります。

今日、ここでお願いしようと思っていたのは、何かのテーマについて文献調査をする時、先生方はもちろんいまままでおり文献調査をおやりになるわけでしょうが、レファレンスにもどんな文献が出てくるのだろうかということでした。文献がでてきて、先生方が調査されたものと合せてみる。そして、こういう文献調査ではだめなんだということであれば、また新しい文献調査の勉強をやると思うのです。そういう要求がないために訓練ができないということに終始しているわけですから。

**大江** レファレンスに対して、どこまで頼めるかという疑問があります。例えば、いろいろ文献をあたって、あるオーサーに出会う。そのオーサーについて他にどんな仕事があるかということが気になる。そういったことが頼めるかということ。労働力との関係で、果してこんなことを頼んでいいのだろうか。例えば、自分でこれをやったら1日かかるだろうなと思うことがあります

ね。そのへん、どこまでできるのでしょうか。

**土屋** あるテーマについて、外国の文献をすべてさらってくれと頼んだ場合、自分でやってもかなりな時間がかかるわけです。それを全然知らない人をお願いしても、おそらく自分が探索したものが出てくるだけでしょうから、現実性がないと思います。ですから、文献の著者名・所在を調べていただきたい、としかいいようがありません。僕はそれでいいと思っている。むしろ、他大学の目録はレファレンスに行けば必ずあるというぐらいに網羅していただき、自分で調べられるようにしてもらいたいですね。

**大江** レファレンスに依頼可能な範囲についてのオリエンテーションがない。これは学生についてもいえるのですが、学部学生に図書館をどのように利用しているかと聞くと、せいぜい開架の本をみているだけです。書庫に実際に連れて行くと、図書館についての認識がかなりあらたまってきて使い方も変わってくるわけです。だから、かなり親切なオリエンテーションが必要だという気がします。もっと宣伝をした方がよいと思います。『図書館通信』などを使って。

また、こういった話し合いを記事にするという目的のためだけでなく定期的に開いた方がよいとも思うのです。

**後藤** 僕は必要としているテーマに関して論文なり、文献なりをレファレンスに検索してもらおうとは一度も思ったことはありません。国文学という学問の性格かも知れませんが、お願いすれば、結果が示されてくると思いますが、結果にたどりつくまでの経過がわかりません。どういう方法をとって、どういふ本を使って、どういふ結果が出てきたかという所を、ぼく自身いつも訓練していきたいと思っていますし、学生に参考調査係に結果だけを聞きに行くということはさせたくないですね。

**長南** 私が感ずるのは、先生方が持ち込まれるものは枝葉のことが多いです。テーマを外れている所ですとか、出版社の住所ですとか、略歴といった質問が多い。正直言ってがっかりします。学生の場合は、文献探索についてわかってよかったという感想がありますし、その点でレファレンスに対する要望が違います。また、例えば、若い先生で新たに専門分野に取り組もうとするとき、よく調べてくれたと言って下さる先生もいます。私としては、一度で諦めないで、二度三度とできるだけ依頼をお寄せいただければと思っています。重要なものでもご相談いただければと思います。係としては、一度調査したものは次の調査の時には簡

単に答が出せます。累積ということでも当方の訓練にもなります。能力の問題や人的物的な問題もありますが、利用していただきたいと思います。

学生の場合も、社会へ出てから論文の一つや二つ書けるような能力が必要で、そのためにも授業の中でもレファレンスを使っていただきたいと思います。今年の6月から7月にかけて書誌の使い方を卒論のためにということで、ほんの僅かな学生ですが、1時間程ガイダンスを行いました。

### ■自然科学系のオンライン探索

**近藤** 人文社会系の調査は、一面そういう性格をもっているわけですね。文献調査の段階が研究であり、教育であると。他方、自然科学系でコンピュータで検索するとすれば、出てきたもので文献調査が終ったということになるわけですね。その点は、人文社会系と自然科学系との文献調査のもつ意味の違いというものがあると思うのです。

**北里** 自然科学系では、どちらかという関連文献がリスト化されたところから始まるわけです。

**平井** これは名大の人に聞いたのですが、オンラインで文献探索をする場合、例えば「木材の圧電性」を調べるとするとキーワードがいくつかあって「木材」で引くと文献が出てきて、その「圧電性」となると、また文献が絞られる。キーワードをどんどん絞って行くと、知りたいものが機械的にわかってくるわけです。自分でやると孫引きでやるので、どこかが抜けてしまうわけです。そういうシステムがこの図書館で可能かどうかはわかりませんが……。

**長南** それはできます。特に、自然科学系、医学系では既にやっております。大学によっては既にレファレンスでやっています。静大でも工学部には入っているようです。料金が高いのですが、学内での希望があればやりたいとは思っているのですが。

**\*長島** オンライン探索は、自然科学においては、今後、文献探索の中心的な役割を果たすようになると考えられ、私としても大いに利用したいと考えています。特に複数のキーワードにより、対象を絞っていく方法は効率的だと思います。

**本間** オンライン探索というのは、人文社会系ではやりにくいのではないかな。

**塚本** 人文社会系はデータ・ベースをつくることから始めなくてはならないのではないのでしょうか。

**土屋** 世界的にみてもあるべきレファレンスというものを議論し、その理想に近づいていくという努力をするのか、今の日本の研究者の文献探索な

どのスタイルを壊してコンピュータ化するという方法をとるのか。いずれの方向も僕は無駄だと思うのですが。そうではなくて、今のやり方を土台として、現状の改善すべき点はどこかを考えつつ現在のスタイルを続ける。僕はそちらの方がいいと思います。

**\*久保** レファレンスの存在価値を高めるためには二つの要因を考える必要があります。一つはレファレンスが各教官にはできないことをできるようになること、即ち調査機能の高度化であり、今一つはこのようなレファレンス充実の方針が支持されるように、各教官の情報に対するニーズが十分高まることです。この二つはニワトリが先か卵が先かのような相互関係にあると思います。

まず第一の要因について説明致しますと、現在、主題文献調査については民間の情報調査機関がいろいろあって、我々のところにもひんぱんに情報調査の勧誘が来たり、見つくりいで資料リストが送られて来たり致します。もちろん、これら業者に依頼すればそれなりの代価を要求されますが、情報の必要度によっては、かなり費用がかかっても利用しようという気になります。それはこれら情報業者が我々の持たないレファレンス・ツールを持ち、我々のできない調査ができるためです。これが本学レファレンスのように我々と同じ手段で調査するなら、頼むに至らないと思います。所要時間においても、調査の完全度においても、また調査過程で得られる副次的利益においても、専門である教官自身が行った方が良いでしょう。

C&C（コンピュータ・アンド・コミュニケーション）技術の進歩によって今日、費用上の問題を別にすれば、新しいレファレンス・ツールには事欠きません。図書館書誌情報については、第一世代と言われる OCLC に次いで、第二世代の図書館業務自動化システム UTLAS が既に登場し、日本でも来春からサービスが開始されます。また国家ベースで出版図書を網羅する JAPAN-MARC の作製が進められています。文献情報検索システムについては、工学部でも既に導入している JOIS の他、MARUNET、SEARCH-J、PATOLIS 等が利用できます。

本学図書館もこのような新しいレファレンス・ツールの導入を一つの目標として持つべきでしょう。このような調査手段の導入・利用は個々の教官の力では及ばないところですから、レファレンスの役割を大きく高めることになると思います。

第二の要因については、工学部に例をとって説明するのがわかり良いかと思ひます。工学という

のは総合学で、関連情報の調査収集と評価が工学研究の前提をなします。現在、科学技術情報と呼ばれるものは、公表される分だけでも、世界で年間推定約 400 万件あり、このうち約 200 万件が科学技術雑誌の記事で、約 100 万件が特許情報です。これらの科学技術情報のうち本学工学部で把握しているものは、科学技術雑誌記事で恐らく 10 万件にも達しないでしょう。特許情報に至ってはゼロです。すなわち、情報調査収集の段階で既に不如意であり、工学はもとから成立ちません。その結果、多くの教官は各人のアクセスしうる範囲の限られた情報の中でできる仕事のみを手がけるようになり、工学の理学化とも言うべき現象が顕著に起こっています。一旦このような状況に落ちてしまえば、情報に対するニーズはもうそれ程なく、図書館のレファレンス機能を充実させるための土壌は今の工学部にはないように思ひます。

今、何等かの方法で大学の情報不如意のネックが解消され、必要な情報に容易にアクセスできるような道が開かれれば、大学教官に新たな意欲が湧き上って来て、工学部に本来の工学を復活させることができるのではないかと思ひます。そうすれば情報に対するニーズもまたおのずと高まって来て、レファレンス機能充実も促進されるという良いサイクルが形成されるはずです。

現時点においてはこの発端となるきっかけが是非必要であり、私は今計画中の浜松キャンパス研究図書館の設立に一つの望みを託しています。本学図書館参考調査係においても、このような大きな観点から、狭い専門にこもりがちな教官に対して指導的役割を果たしていただきたいと思ひます。

また、前述のように膨大化した科学技術情報のもとでは、必要な情報を引き出すために充実した情報処理や検索システムを備えているところだけ、即ち大企業だけが研究開発に有利になり、中小企業や個人研究者が不利になるという情報格差が生じています。大学図書館がこのような情報格差の是正に一役買えれば有意義なことと思ひます。

**本間** 研究者側の文献探索に伴う経験、あるいは気持がでてきたのですが、参考調査の現在の状況が、どういう点で改善可能か、そのためにはどういう条件が必要か、物質的な条件を含めて話し合っただけでは、話が絡み合っただけではないでしょうか。

**後藤** 領域毎の基本的なレファレンス・ブックは、図書館の予算で買えないでしょうか。

**司会** 図書館にはそのような予算はないと思ひます。予算について、参考調査係から説明願ひます。

**長南** 参考図書予算として、学内負担額として300万円あります。その中から雑誌などを抜き、240万円が参考図書にあてられています。それに本省から42万円をいただき、合計280万円ぐらいになります。しかし、現在、外国の参考図書で継続されているもので、米国の『National Union Catalogue』や英・独・仏などの主な書誌を含め200万円近くになっていて、和書の購入経費は80万円になっています。個別的な書誌まで、とても手がまわらないのが実情です。また、絶版になったものをコピーで入れようと思っても、その予算がありません。書誌などは全学購入費で買うとか、何か良い方法がございましたらだしていただきたいのですが。

**土屋** コレクションから言えば、できれば外国の文献などのインデックスなどもまとめて欲しい。学内でいろいろ反対があって実現できないと聞いているが、一定予算をレファレンス用に確保してプールし、50~100万円のものでも購入できるというようにしていかないと、レファレンスに行って文献探索をするという具合にはなかなかならないでしょう。

**長南** そういう資料には自然科学ではSCI、社会科学でSSCIとかがあります。こうした基本的なものは図書館として欲しいと考えております。年間150万円ぐらい予算がないと購入できませんが。

**近藤** 毎年文部省で行っている実態調査がありますが、静大クラス（A B C Dの4段階の内のBクラス）の大学が17大学あります。昭和54年度の文部省実態調査でみますと、業務内容の区分で所在調査、事項調査、利用指導という項目があります。そして所在調査の件数は平均よりずっと高い。静大本館で2,916件、Bクラス17大学の全国平均で1,582件です。事項調査は静大156件、全国327件と下まわっています。利用指導でも、静大168件、全国337件と下まわっています。もっとも、このデータでは、教官・学生の利用者別区分はできていません。文献複写では、全国が3,619件、枚数ですと60,855枚、静大では3,320件、49,617枚となっていて全国平均より低い。海外への文献複写依頼については、静大が圧倒的に多くて、静大174件、全国平均が14件となっています。その他は大体平均値に近いということです。

#### ■外国雑誌の集中化をめぐる

**北里** 自然科学関係の外国雑誌の出版が増加し値上りも激しい。これらに対処するには各大学で、また、大学内では関連学部で手分けして購入する

必要があります。そして、日本全体でみれば、どこかに必ずある状態をつくらなければなりません。ここでコピーの問題がでできます。これはできるだけ迅速にしてもらわなければなりません。

**近藤** この問題については、昭和52年から、自然科学系の外国雑誌について拠点校システムがつくられています。理工系は東工大がセンター館となり、重点的に予算が配分され、収集され、日本にない雑誌を集めて、コピー・サービスをするということになっています。現在、収集度から言えば、理工系が一番遅れており、医学・生物系では阪大、九大、東北大が拠点校になっています。農学系は、東大農学部と鹿児島大が拠点校です。

**\*長島** 外国雑誌の集中化は、原則として賛成です。各教室ないし、個人段階での経済負担が軽減され、また結果として雑誌の種類が豊富になるなら喜ばしいことと考えます。特に中間分野的な色あいの研究をしているものには豊富な種類の雑誌が一方所で読めるようになるのは大賛成です。しかし反面、かなり専門的に分化した領域のみを研究し、一冊の雑誌があれば事足りるという人には、集中化は、手もとから雑誌を遠ざけることにしかありません。このような人には別に考慮する必要があると考えます。

**土屋** 拠点校で全国的に集める場合と学内で中央図書館に集中するという構想があるだろうが、これには良い面と悪い面がある。例えば、統計資料など手もとに置かないと利用できません。持出厳禁だと利用できなくなります。大学内でさえそうなる。しかも、全国的に集中されると、他の所の予算配分を減らしてそこへ予算を重点的につける。そうすると相当大きな問題でしょう。

むしろ、日本の大学図書館で一番問題なのは、現物を見せてくれないことです。カードで文献を探して、その上で文献を手にしてみることも時間がかかる。国会図書館での窓口を通しての閲覧は一日に数冊しか見られない。また、東大の場合も非常に保守的で、貸出しはしていない。文献はここで見てくれという。文献保存の面からそういう措置をとるならば、せめて書庫へ入れて欲しいと思います。

**館長** 日本の図書館では研究者でも書庫に入れないところが多いのですが、外国では研究者であればよろこんで入れてくれるところが多い。

**司会** そろそろ時間がまいりましたので、館長にしめくくっていただきたいと思います。

**館長** レファレンス、研究者のためのレファレンスですが、どれだけ研究者に豊富な適切な情

報・サービスを提供できるかということですが、そのためにはレファレンサー自体が勉強しないといけない。

今は、自然科学も社会科学もまとめてやっている状態ですから、これじゃ話にならないので、専門別レファレンサーを養成していくことが、今後必要だと思いますが、これにはまず人員の問題がおこります。まあ、そこへいくまでにも、教官から求められた情報・サービスに応ずるのに必要かつ十分なレファレンス・コレクションを確保することが先決だと思います。レファレンス・コレクションの充実が、結局は研究者のための情報・サービスの質的、量的充実に直接つながる問題ですから、先ほども出ましたように、他大学に比べても不十分な現在の資料費などについて、全学の研究者や部局責任者の理解と協力が望まれます。

(これは座談会の記録を要約したものです。編集責任と文責は編集者にあります。)

## 国際連盟刊行物資料について

松田竹男

1979年度の文部省大型コレクション購入予算によって、本学図書館に「国際連盟コレクション (League of Nations Documents)」が購入され、先ほどその分類整理をおえて、マイクロ資料室で閲覧に供されることになった。

いうまでもなく国際連盟は、第一次大戦後の世界平和の維持を目的として、1919年のベルサイユ条約によって設立された国際組織であって、現在の国際連合の前身をなすものである。国際連合のコレクションならまだしも、すでに解散してしまった国際連盟のコレクションを何でいまさらといふかる人もあるかもしれない。しかし、現在の国際連合は連盟時の貴重な経験をふまえて設立されたものであって、国際連合の機構や性格を正しく理解するためには、国際連盟との比較・検討を欠くことができないのである。たとえば、安全保障理事会における侵略国の認定手続は、連盟時代の認定手続を抜きにしては理解しえないであろう。

また、現在、国際連合がとりあげている問題のなかには、連盟時代から継続的に扱ってきているものが少なくない。とりわけ経済の分野では、自由貿易を基調とした19世紀の世界経済秩序の破綻が明白となり、独占段階の世界経済秩序が自覚的に探求されはじめたのがこの時期であったから、今日の資本主義世界の「危機」を分析する場

合にも、しばしばその出発点である戦間期へさかのぼることが必要とされてくるのである。ケインズのインフレ政策による人為的な景気刺激は、第二次大戦後の資本主義経済を支えてきた特効薬であり、70年代以降、その効能がおちてきたことが問題とされているのであるが、その前提である管理通貨制度が導入されたのも戦間期のことであった。ケインズのインフレ政策の破綻を意味するスタグフレーション(不況とインフレの同時進行)に直面して、研究者の眼が戦間期に向けられるようになってきたのも、理由がないわけではない。こうした戦間期の研究にとって、国際連盟の文書は不可欠の資料と言ってよいであろう。

今回購入したコレクションは、文書数にして3,571点にのぼり、それらが、I公式記録、II経済、III金融、IV社会、V法、VI A委任統治、VI B奴隷取締、VII政治、VIII運輸交通、IX軍縮、X財政、XI麻薬取締、XII A文化協力、XII B国際事務局、一般、レファレンスの16部門に分類されている。もちろん、これらの部門のすべての文書がそろっているわけではないし、大きなところでは、連盟活動の中心であった理事会の公式記録や条約集、それに国際司法裁判所の前身である常設国際司法裁判所の判例集がはいっていない。しかし、これらはいずれもマイクロフィッシュ又はリプリント版で入手可能であり、せつかくのコレクションを完成させる為にも購入が望まれよう。なお、整本済の初期の文書類のいくつかにDavid Hunter Millerの印がおしてあるのは、この著名な国際法学者の蔵書だったことを示すのであろうか。

めばしいところをひろってみると、まず連盟総会の公式記録はすべてそろっている。大国中心の理事会に対してしばしば批判的態度をとった中小国の姿勢を知るためには不可欠の資料である。また、委任統治委員会の記録や軍備年鑑等の軍縮関係記録もそろっており、第二次大戦後の信託統治制度や軍縮交渉を歴史的に分析するための貴重な材料である。経済関係では、Statistical YearbookやWorld Economic Surveyが完備しているほか、1920年の国際金融会議など、国際連盟の主催した国際会議の議事録・文書なども含まれている。

これらの記録・文書類はいわゆる「稀覯コレクション」ではなく、第二次大戦中のものを除けば、東大や京大など戦前からの大学にも入っているものが多い。しかし、すでに述べたように、今日の人文・社会科学はもとより、自然科学の一部にとっても、戦間期研究の不可欠の資料であるだけに、それを身近に利用できるようになったことの

意義は大きい。折しも三島にある日本大学国際関係学部の図書館が国際連合の寄託図書館に指定された。連盟・連合の文書類がともに身近に利用できるようになったわけであり、これを機会に研究の飛躍的な進展を期待したいものである。

(人文・国際法)

## ■浜松分館だより

複写機の使用について

1月から分館の複写機にも、用紙を備えつけることにしました。従来は、利用者が各自、用紙を持ち込まなければ複写できず、御不便をおかけしていましたが、これによって用紙を準備する手間や、他所で複写するために雑誌等を借り出す手間が省け、その場で簡単に複写できるようになりました。

また、これを機会に、原則として複写のための雑誌の貸し出しは行わない方針をとりますので、利用したい雑誌が貸し出し中で見ることができないといった不都合さも、大分解消すると思われま

す。使用伝票には、今までのメーターの記入のほか、使用目的、複写箇所等も記入していただくことになり、多少わずらわしさを感じられる方もあるかと思いますが、著作権の関係、また複写目的の確認のため、御協力をお願いします。

以上は校費で使用される場合です。私費での複写を希望される場合は、今まで通りカウンターへお申し出ください。

今後も利用しやすい図書館をめざして、一つ一つ検討していきたいと思っておりますので、複写機の使用についてはもちろん、その他お気付きの点がありましたら、御意見をお寄せください。

## ■図書館委員会報告

○昭和55年度 第5回 S.55.10.20

議事1. 外国雑誌について

本年度の外国雑誌購入費の示達があった場合の取扱いについて種々審議した結果、この委員会の審議の要旨を5項目にまとめた。

2. 図書館の基本問題について

館長から別紙附帯事項取扱いについて説明があり、各委員の意見交換を行ったが、次回継続審議することとした。

3. その他

(1) 教養部で計上した学生用図書購入費による図書の選定については教養部に一任した。

○昭和55年度 第6回 S.55.11.26

議事1. 外国雑誌について

館長から、別紙外国雑誌購入費配分試算表

の説明があった後種々審議した結果、修正した試算表により配分することにした。

2. 図書館の基本問題について

館長から、図書館経費等の過去8カ年の別添資料を作成したので、各委員で検討して頂きたいとの提案があり、次回継続審議することとした。

3. その他

(1) 学生用図書購入費について

学生用図書購入費(第二次)が試算額どおり了承された。

(2) 事務部長から、別冊外国資料流通問題検討会第一次報告について説明があった。

## ■教官著作寄贈図書

伊藤正義(教育学部)

『恋する男の告解』 ジョン・ガワー作

伊藤正義訳 篠崎書林 1980 (931/G74)

黒羽清隆(教育学部)

『日中15年戦争(上)(中)(下)』 黒羽清隆著

教育社 1977~1979

(S210.74/Ku72/1-3)

(教育社歴史新書・日本史)

『日本史の森——ある歴史教育論の試み——』

黒羽清隆著 実教出版社 1976

(375.32/Ku72)

『日本史教育の理論と方法』 <増補版>

黒羽清隆著 地歴社 1977

(375.32/Ku72)

『人物史で学ぶ日本の歴史』 黒羽清隆著

地歴社 1980 (210.1/Ku72)

真田孝昭(人文学部)

『狂気の烙印——精神病の社会学——』

T・J・シェフ著、市川孝一・真田孝昭訳

誠信書房 1979 (493.7/Sc 2)

## ■お知らせ(本館)

(1) 春期休業中の貸出について

貸出冊数: 4冊以内

貸出開始日: 2月16日(月)

返却期限: 4月15日(水)

なお、卒業見込者並びに工学部3年進級見込者には、長期貸出はいたしません。

又、今期は指定図書の貸出を中止します。

(2) 休館

3月5日(木)~6日(金)

3月23日(月)~4月4日(土)

なお、春期休暇中の3月23日(月)~4月10日(金)までは、延長開館を行いません。